

## 宮城公子教授のご退職にあたって

宮城公子先生は今年の三月三十一日をもって定年を迎え退職される。一九八二年四月に助教授として着任されてから二四年間、本学における教育・研究を支えてこられた。

先生のご専門は日本近世・近代の思想史であり、特に幕末変革期における思想について堅実な研究を発表されてきた。先生は日本の近代思想の形成を儒学という伝統的な思想がどのように規定したのかを把握することを課題とされ、思想の独自の展開を分析するだけではなく社会との関わりにおいて思想を把握し評価することを重視されてきた。このような観点が思想の歴史性をとらえるために重要であることは今では常識になっている。そして先生のご研究はこの常識を作り上げた一翼を担っている。

先生の主要な御論文は昨年刊行された『幕末期の思想と習俗』にまとめられているが、初期のご研究は中江兆民と大塩平八郎が二つの柱となっているように思われる。とくに先生が一九七七年に発表された御著書『大塩平八郎』は大塩研究の基本的な文献として高い評価を得ている。また中央公論社刊『日本の名著』シリーズでは『大塩中斎』の責任編集をつとめられ（一九七八年刊）、これも定評を得たお仕事となっている。さらに近年は儒学者たちとは異なった位相を明らかにするために復古神道・国学を考察するなど、新しいテーマにも取り組んでおられる。また一九九九年四月から一年間は京都大学教育学部で国内研究に携わり、台湾や韓国で行われた思想史の学会に参加されるなど、活動の幅を広げられている。

所属する学科は学科増設により社会学科から歴史文化学科に移ったが、教壇では終始、日本史の近世・近現代を担当されてきた。専門科目の「日本史の諸問題」「日本文化史」「史料研究」等のほか、広域副専攻では「歴史のなかの国際化」を講義されてきた。また京都大学文学部（一九八二年）や島根大学法文学部（一九九一年）にも出講されている。学生の関心が大きく変化するなかで、先生は映画やビデオ教材を取り入れ、デジカメで写真をとって見せたりと、色々な方法を試みておられた。

アウトローの歴史を通史で講義されたこともある。パソコンのトラブルにはよく悩んでおられたが、先生は本来的に好奇心が旺盛であり、新しいものが大好きなのだと思う。

宮城先生のゼミは指導が厳しいことで有名であった。ただし厳しいだけでなく、先生はとても面倒見が良かった。「別のゼミにすれば良かった」と歎いていた二年生が卒業の時に「あの時にやっておいて良かった」と言うのを耳にしたこともある。安易な進路を取ろうとした学生が先生に叱責され、卒業後に感謝の意を伝えるにきたこともある。また学生の話聞くのも上手で、学生の間で流行していることにも敏感であった。ご多忙のなか京都へ見学に出かけ、北海道・沖繩へ旅行と、ゼミ生を引率して活発に動いておられた。色々と苦労話をうかがったこともあり、「最近の学生は……」と不満を漏らされることもあったが、先生は学生とともにあることを心がけておられた。あれこれと愚痴をこぼしながらも、宮城先生は学生たちが好きだったのだ。

会議における歯に衣着せないご発言は記憶に強く残っている。先生のご意見がうかがえなくなるのは少々寂しい。しかしともかく今は四半世紀におよぶ本学での職を終えて退かれる先生に、感謝の意を表すとともに、これからもご健康で活躍されることをお祈り申し上げたい。ありがとうございました。

(佐藤泰弘)